

建築主：学校法人幕張インターナショナルスクール
 設計：株式会社シーラカンスアンドアソシエイツ
 施工：株式会社畔蒜工務店
 所在地：千葉市美浜区若葉3-2-9

設えの構想力を引き出すタフな空間

幕張インターナショナルスクール



おおらかに配置された大小様々な内外の領域

(写真提供/ダイムワカイ)

1.5ha弱の敷地に、幼稚園+管理部門、小学校低学年、小学校高学年の3つの塊が連なっている。低学年の各室には中庭から入る。高学年の各室はメディアセンターと直結している。低学年ユニットと高学年ユニットのヒンジになっているのが多目的ホールだ。複数の大きな空間の連鎖がそのまま主動線になっていて、小さな空間へと分かれていく構成が明解だ。逆に、各室から大きな空間に出てきて集まると違ったアクティビティが生まれる。英語を母語とする文化圏の教員たちは、子どもたちの作品などを駆使して、空間の設えを奔放に競っている。竣工当時はがらんとした大空間だったメディアセンターは、いい感じにコンテンツが充実してきた。外国人教員たちの手になる日本庭園も出現した。設計時点では想定外だった。それでも建築自体のコンセプトが霞むどころかかえって浮き彫りになるタフな空間がいい。学校のなかは、インプロビゼーションに溢れ、あたかも街の縮図のようで楽しい。

が、一步、学校の外に出ると、そこ

は幕張新都心の文教地区で、様々な類似機能施設が相互に関係なく並んでいる。歩いて帰宅する子もいるが、多くはスクールバスを利用している。「英語で学ぶ」特殊な学校のため通学圏はかなり広い。校門の前には、マイカーの長い列が子どもを待ち構えている。習い事や塾へとハシグする子らも少なくないという。

隣接する幕張パティオスー帯には、オープンスクールの旗手となった打瀬小学校がある。10年以上経った今、オープンプランの「次」を担う学校建築として、教室を開くにとどまらず、街を、社会を、オープンに変える力を、本スクールの建物に期待したい。

(岡部明子)



調べ学習などに使える学校全体のリビング。天井から下がる大きな照明は居場所作りのきっかけとなる。



中庭の様子。内外一体的に利用できる庇下の縁側のような空間。

(撮影/上田 宏)